

場所依存性と経験依存性に着目した 街歩きにおける来街者体験の整理分析手法

高浜 康亘¹・モウ 大喜²・福井 恒明³

¹非会員 国土交通省東北地方整備局北上川下流河川事務所
(〒986-0861 宮城県石巻市蛇田字新下沼80, E-mail:takahama-y82ac@thr.mlit.go.jp)

²学生会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:maw@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

³正会員 博士(工) 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科
(〒162-0843 新宿区市谷田町2-33, E-mail:fukui@hosei.ac.jp)

本研究は、街歩きにおける来街者の体験を、生活者や観光客といった来街者の属性にかかわらず分類するための手法を提示するものである。街歩き体験の、その場所との関係の有無（場所依存性）および来街者個人の経験との関係の有無（経験依存性）という2つの点に着目し街歩き体験を整理するため、3つの都市で4ペアによる街歩き実験を行い、実験中の会話を分析することで、手法の有用性を確認した。またその結果として、街歩き中の会話（体験）は「目にしたものを話題とするもの（場所依存・非経験依存）」が多い一方で、会話のやり取りが増えると「街と関係なく個人のことにに関するもの（非場所依存・経験依存）」に移行する例が多いことも確認された。

キーワード:街歩き, 回遊行動, 体験, 会話, 場所依存, 経験依存

1. はじめに

(1) 研究の背景

近年、「歩いて楽しい街」や「回遊性の向上」など、歩行者に焦点を当てた言葉やまちづくりの施策をよく見かける。またそれだけでなく、いわゆる「散歩本」がメディアで取り上げられたり、テレビではレギュラーの街歩き番組が組まれたりするなど、市民の側からも街歩きに注目が集まっていると言えるであろう。

そのような事情を反映してか、2000年頃から「商業地の回遊行動」に関する研究は増えており、後述のように歩行者と店舗ないし街との関わりあいという点において、高い成果を挙げていると言える。しかし、ほとんどの先行研究では、歩行者の詳細な行動特性を量的に記述することに主眼があり、その行動の背後にある意図や、その行動がどういった体験として認知されているかといった質的な部分は捨象されてきた。

「楽しい街歩き」は、来街者自身が街で何を見て、何を思うかにかかっていると考える。よって街歩きを質的に研究するならば、街から受ける外的な刺激だけでなく、来街者の内面的な要素に注目することは避けられない。

(2) 既往研究と本研究の位置づけ

既往の街歩きないし回遊行動に関する研究を見ると、大きく分けて歩行者流（マクロな視点）と、個々の来街者の歩行行動特性（ミクロな視点）がある。本研究が対象とする後者については、観察する来街者がどのようにふるまうのかを見る手法として主に、美藤ら¹⁾、本多ら²⁾のような「アンケート調査」「ヒアリング調査」、高橋ら³⁾長澤ら⁴⁾のような「追跡調査」が行われてきた。これらを来街者の内面を観察するという観点から見ると、アンケート・ヒアリング調査は感じたことを聞き取るのに優れてはいるが、内容は街歩き後の全体的な意見であり、リアルタイムな意見・感想を聞き取ることは難しい。一方、追跡調査はリアルタイムな感想が記録できるが、高橋らの研究のように無作為抽出であれば被観察者に気づかれたり（木下ら⁵⁾が指摘）、被観察者に十分近寄ることが難しかったりといった理由から、内面の観察よりは歩行者動線などの観察に適している。また、長澤らのように実験協力を依頼したうえで追跡調査をすれば、リアルタイムに詳細な行動記録ができ極めて優れていると言えるが、被験者は追跡によるビデオ撮影を意識した街歩きをしてしまう可能性を排除できず、日常的な街歩きの内面のデータが得られない可能性がある。

また、既往研究では全般に街歩きをする被験者の属性（来街経験等）の違いについては十分考察対象となっていない。

(3) 研究の目的

以上より本研究は、来街者が街からどのような刺激を受け、それによりどのような意見・感想をもつかといった来街者の内面的な要素から街歩きの体験を捉え、それらを整理するための枠組みを提示し、これを用いた分析事例を示すことでその有用性を示すことを目的とする。

2. 街歩き体験を整理する考え方

(1) 街歩き体験の整理

街歩き中のある体験について、その体験の要因を理解するために、図-1に示す2軸で整理する枠組みを以下に提示する。

街歩き体験には、その場所から刺激を受けて何らかの考えや感情が生まれる体験と、その場所とは関係なく自ら考えや感情を抱くような、直接街の中で起こるべき必然性の低い体験がある。この点に注目し、前者をその場所に依存した体験、後者をその場所に依存しない体験として分類する、「場所依存軸」を設定した。

また、街歩き体験には、個人的な過去の出来事を想起する体験と、その場で何かを発見するような、個人の過去の出来事とは直接関係がない体験がある。この点に注目し、前者を経験に依存した体験、後者を経験に依存しない体験として分類する、「経験依存軸」を設定した。

場所依存軸と経験依存軸という2軸によって街歩き中の体験は、図-2のように4象限に分類される。

(2) 本整理手法の特徴

街歩き体験は当然ながら各個人で異なり、それゆえに多種多様なものである。よって従来街歩き体験を考える際は、リピーターであるとか、観光客であるとかいった具合に来街者の属性を分けて考える必要があった。一方、本研究で提示する整理手法は、場所に関連することを想起するか、関係ないことを想起するか（場所依存性）、その場所の思い出や事前に持っていたイメージに関連することを想起するか、その場で考えたことを想起するか（経験依存性）、という2つの観点に基づき体験を整理するため、来街者の来街経験の違いを前提として、一括して同じ枠組みの中で分析・考察ができる。よって本研究で提示する整理手法を用いれば、来街者の属性にとらわれず、より総合的に、街歩き体験の内容を捉えることができる。

3. 分析例（街歩き中の会話分析）

(1) 整理手法の導入

2章で示した枠組みを用いた街歩き体験の分析例を示す。ここでは2人1組の街歩き中の会話内容について分析する。^{補註1)}

(2) 実験の目的

実験の目的は、街歩き中の会話内容および歩行経路に

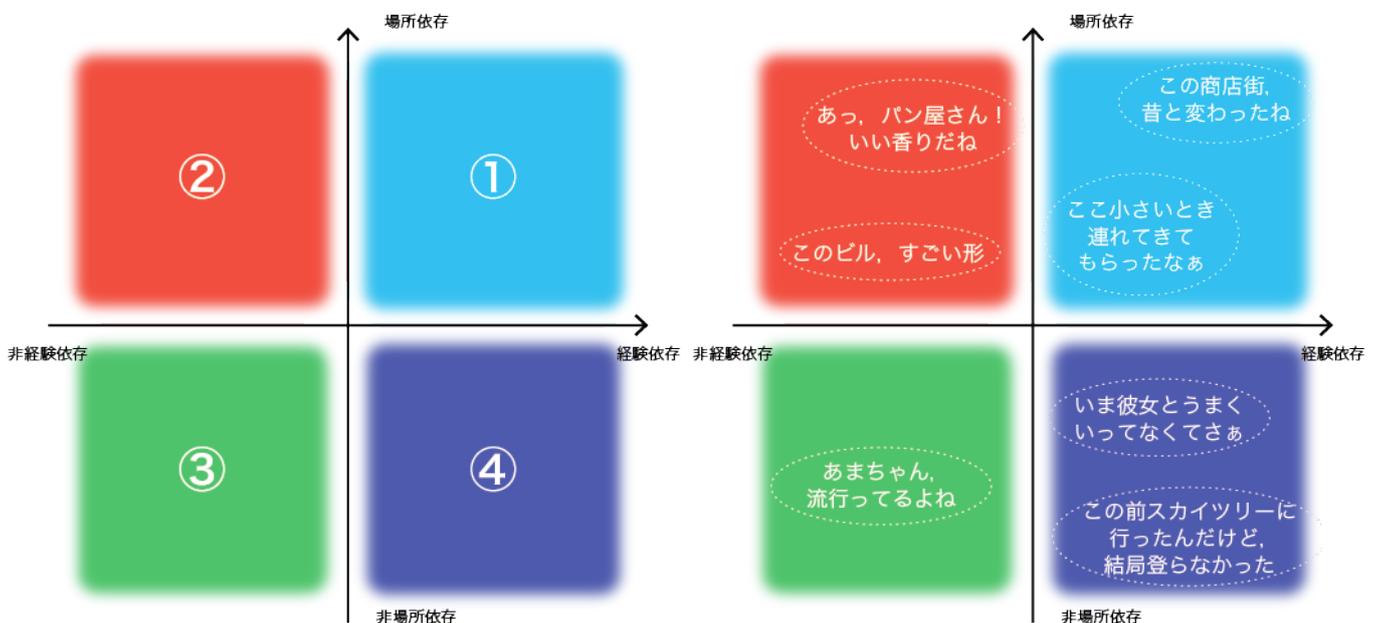


図-1 街歩き体験の経験・場所依存による整理

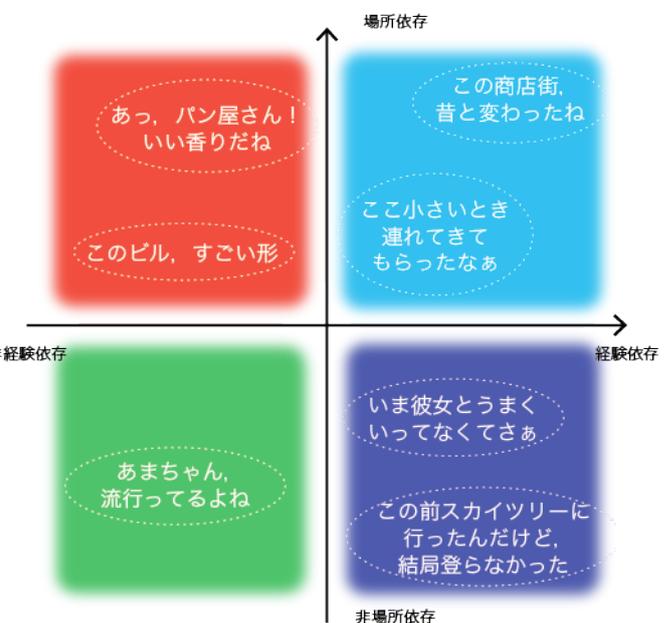


図-2 会話の分類例

関するデータを取得し、街歩きをする人がどういったことを考え、なにを感じとるのかを考察することである。

(3) 対象地

本研究は、街歩き中の、外的・内的両面からの街との関わり合いに着目している。そこで、「場所依存」の観点から、街を構成する要素が多様で、外部空間からの刺激が豊富な街であること、「経験依存」の観点から、来街者が多く、街での経験ないし街のイメージが多いと予想される街であることを踏まえ、代表的な商業地として、銀座・浅草・吉祥寺の3地区を実験対象地とした。

(4) 被験者

被験者は、街歩き中に自然に会話が発生するよう、もともとの知り合いのペアとし、3地区全てを実験できることを条件に、若者2組、高齢者2組の計4組とした。

また、被験者の年齢や居住地、ペアの関係、来街経験、よく行く街などのデータをアンケートによって収集した。(表-1、表-2)

表-1 被験者の属性データ

被験者	年齢	性別	居住地	最寄駅	被験者ペアの関係
若者A1	23	男	杉並区	三鷹台	高校時代の先輩後輩
若者A2	22	女	杉並区	久我山	
若者B1	21	男	世田谷区	祖師谷大蔵	大学の友人
若者B2	21	男	北区	王子神谷	
高齢者A1	62	女	川口市	東川口	座禅サークルの友人
高齢者A2	60	女	多摩市	永山	
高齢者B1	70	女	江東区	展示場前	座禅サークルの友人
高齢者B2	70	女	板橋区	板橋区役所前	

表-2 実験対象地への来街経験とよく行く街

被験者	銀座	浅草	吉祥寺	よく行く街
若者A1	年1回	年1回	月1回	吉祥寺、渋谷、六本木
若者A2	週1回	年1回	週2回	吉祥寺、下北沢、新宿
若者B1	年1回	年1回	2回のみ	新宿、池袋、下北沢
若者B2	0回	1回のみ	年2回	池袋、赤羽
高齢者A1	年4回	年2回	今は0回	行け部栗、新宿、上野
高齢者A2	年1回	年1回	年2回	新宿、立川
高齢者B1	月1回	月1回	今は0回	お台場、豊洲、池袋
高齢者B2	年2回	年2回	年2回	池袋、谷中、門前仲町

表-3 街歩き実験の日時

グループ	対象地	日付	時間	時間(分)
若者A	銀座	2011/12/12	14:42-15:54	72
	浅草	2011/12/19	11:15-12:18	63
	吉祥寺	2011/12/16	13:07-14:12	65
若者B	銀座	2012/1/12	14:32-15:54	82
	浅草	2012/1/10	13:00-14:19	79
高齢者A	銀座	2011/12/19	13:53-15:00	67
	浅草	2012/1/4	13:00-14:09	69
	吉祥寺	2011/12/21	14:00-15:18	78
高齢者B	銀座	2011/12/18	14:19-15:26	67
	浅草	2011/12/18	10:00-11:26	86
	吉祥寺	2011/12/15	13:59-15:13	74

(5) 実験の方法

被験者がGPSロガーとICレコーダーを携帯した状態で、実際に対象地をあるいてもらう街歩き実験を行った。その際、できるだけ日常の来街に近いデータを得られるように、店舗への入店及び商品の購買を許可し、行動範囲の制限は設けずに歩いてもらった。実験時間はおおむね1時間から1時間半とし、実験終了のタイミングは、日常的な街歩きを想定するよう指示し、被験者の判断に任せた。実験は、若者2組、高齢者2組の計4組の被験者に対して、それぞれ3地区ずつ合計12回実施した。(表-3)

4. 分析と考察

(1) 実験結果の反映

街歩き体験を分析するにあたり、それぞれの街歩き中の会話を次の基準で分節し、1つ1つの会話のまとまりを分析対象とした(図-3)。

- 応答が切れるところ
- 話題が切り替わるところ
- 会話の間が空くところ

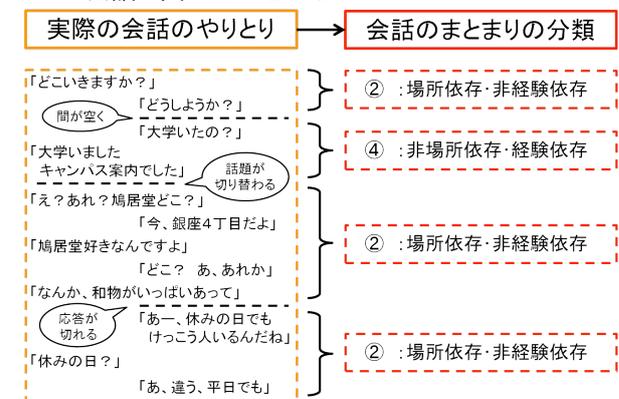


図-3 会話の分節と分類の例(若者Aグループ銀座)

さらに、各々の会話のまとまりに整理手法を適用して分類した結果を地図とグラフにまとめた。(図-4、図-5)

街歩き実験における会話のデータより、被験者が街の様々な要素に興味を示し、それについて会話を展開している一方で、街とは全く関係のないプライベートな話をする例が見られた。これは、街歩きをする時に必ずしも単純に街の要素に着目しているのではなく、街歩きをする時の体験が多様であることを示唆している。

図-5から、1回の街歩きにおける体験の種類の構成比率はグループや歩く街に関係なくバラバラであるが、例えば若者Aグループに着目すると、来街経験の少ない浅草と、来街経験の多い銀座や吉祥寺とで、②〔場所依存・非経験依存〕の比率が浅草の方が銀座や吉祥寺より

も高く、来街経験が影響を与えていることが示唆される。また、若者Bグループに着目すると、①〔場所依存・経験依存〕の構成比率が高く、その街における個人の経験を2人で共有していることが窺える。一方で、高齢者Aグループや高齢者Bグループでは、高齢者Aグループの銀座を除き、②の割合が非常に高く、街に存在する多様な要素に興味を惹かれて、その要素について話をしていることが分かる。

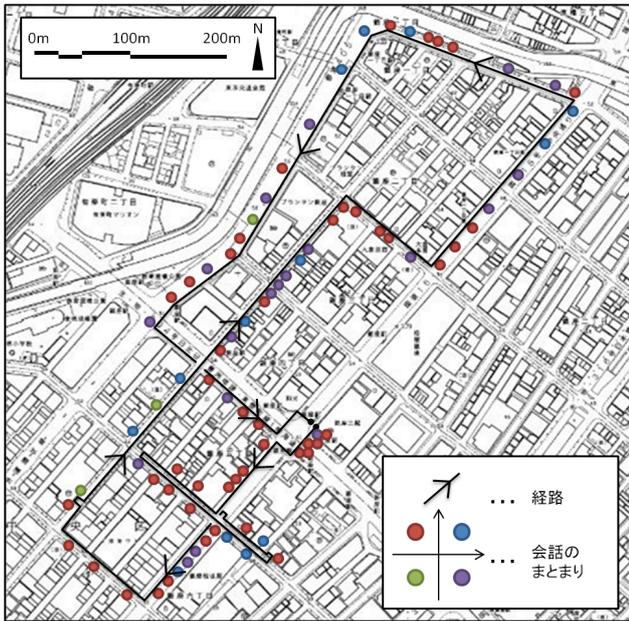


図-4 街歩き実験結果と会話のまとめりプロット
(若者Aグループ銀座)

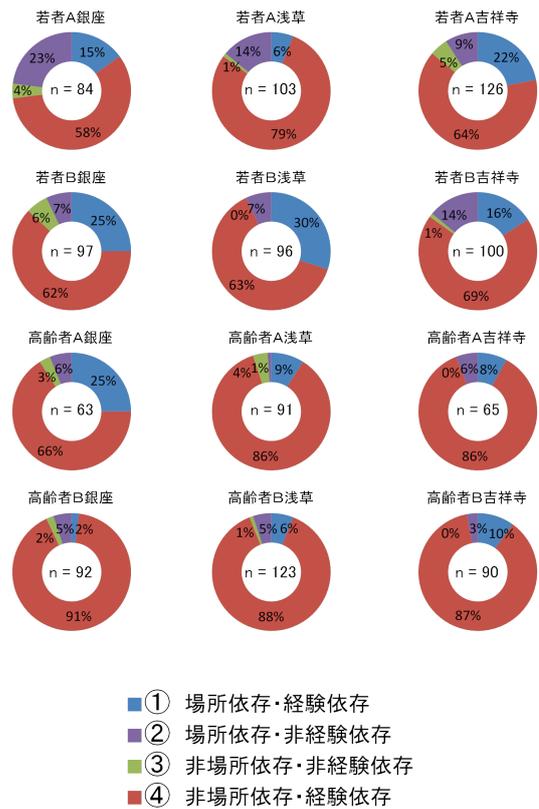


図-5 分析した会話内容の場所依存・経験依存の割合

若者Aグループ

高齢者Aグループ

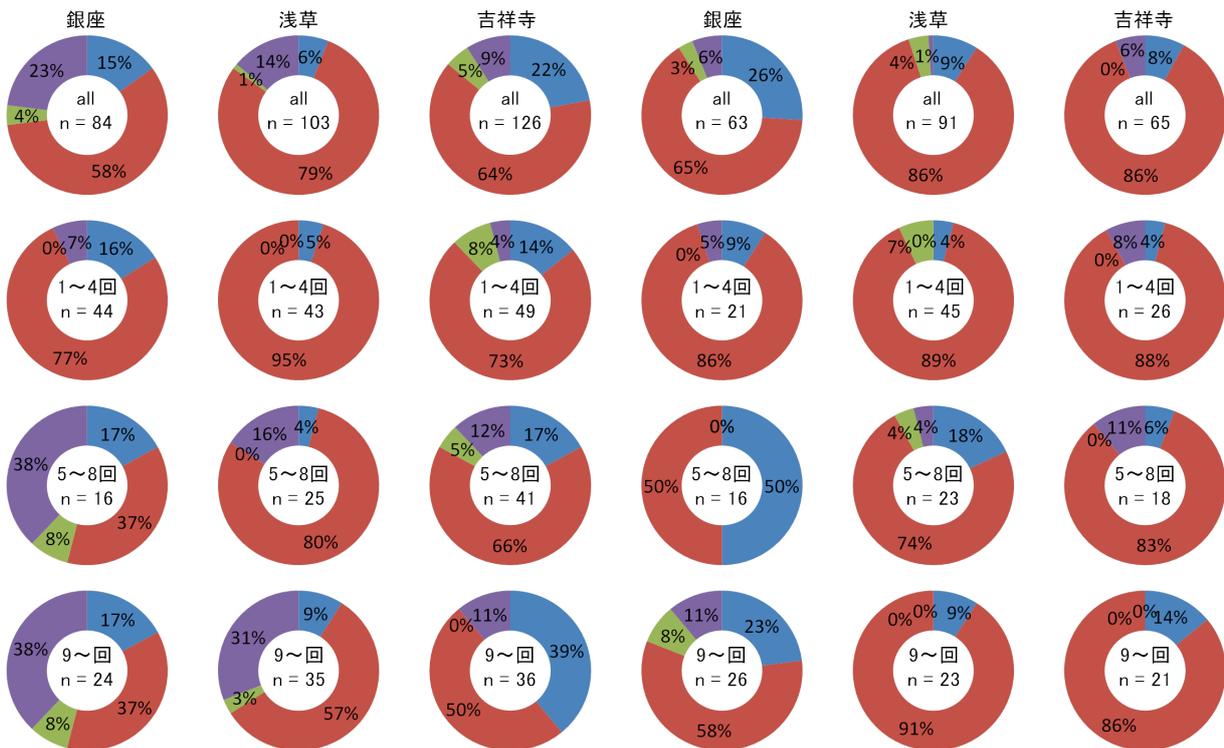


図-6 会話のやりとり回数(若者Aグループ・高齢者Aグループ)：凡例は図-5と同様

さらに、本実験の範囲において、高齢者が持つような遠い過去における経験よりも、近い過去においてどれだけその街に来たことがあり、その時にどのような体験をしたのかが、新たに街歩きをする際、場所依存・経験依存の体験の有無に影響を与える可能性が考えられる。

(2) 会話のやりとり回数

次に、1つの会話のまとまりの中での会話のやりとり回数と場所依存性／経験依存性の関係について分析した。4. (1) で分節した会話について、その全ての会話データを参照しながら1つ1つの会話のやりとり回数を集計した(図-6, 図-7)。

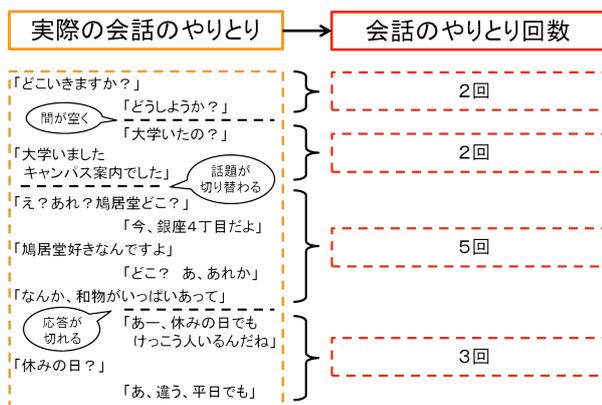


図-7 会話の分節とやりとり回数(若者Aグループ銀座)

若者Aグループでは、やりとり回数の少ないものは②〔場所依存・非経験依存〕の構成比率が高く、やりとり回数が多くなると④〔非場所依存・経験依存〕の構成比率が高くなっていることが分かる。実際の会話のデータも考慮に入れると、若者Aグループでは、街の要素とは関係のない(非場所依存)個人的な(経験依存)話の場合、次の話題に移ることなく、その話題について長く話すという現象があることが読み取れる。

一方で、高齢者Aグループでは、③や④といったその街には関係のない(非場所依存)話題は短くすぐに別の話題に移るのに対し、①や②といったその街を歩いているが故に生じた(場所依存)話題については次々に会話が進展していることが分かる。

(3) まとめ

2章で提案した枠組みを用いることで、場所依存性と経験依存性という新たな観点で街歩き体験を整理することができた。

街歩き実験の会話データを整理手法を用いて分析すると、場所依存・非経験依存という②の構成比率が高いものの、どの被験者グループにおいても、どの対象地においても、結果は様々であった。街の刺激の多さが体験の

豊かさに直接結び付くのではなく、その対象地への来街経験や、グループのペアとの会話の中身(街に関するだけでなく思い出話や世間話も含む)によって街歩きの体験が影響を受けることを端的に示すことができたと考えられる。

5. 結論

(1) 成果

本研究では、来街者の街歩き体験の内面的要素として、街歩きの「場所依存性」と「経験依存性」に着目した体験の整理手法を提示し、リピーター・観光客のような来街者の来街経験による場合分けをせずに分析を行う枠組みを提案した。さらに、この枠組みを用いた分析の実例として2名による街歩き中の会話内容の分析・考察を試みた。その結果からは、街歩き体験はその場所に強く関係し、個人の経験との関係が弱い(あるいは当座の)体験〔場所依存・非経験依存〕、すなわち「目にしたものを話題とする会話」が多いことが特徴として挙げられた。しかし一方で、会話のやり取りが増えると、その場所との関係が弱く、個人の経験に強く根ざした体験〔非場所依存・経験依存〕、要するに「街とは関係なく個人のことに係る会話」が多くなるという状況も観察された。

街歩き体験とは、その街への来街経験や、誰と一緒に歩くかといった要素によっても大きく変化するものであり、そのことが街歩きによる当該地区に対する評価の一般性や安定性に関する大きな障害となっていた。本研究で提示した手法は、そのような来街者による体験の変化・多様さを受容した上で街歩き体験を分析することができると考えられる。分析対象として、今回は会話内容に着目したが、データ取得さえ可能であれば、口に出さずに考えていることなど街歩き中の来街者の内面全般の分析に適用可能である。

(2) 今後の課題

本研究では、来街者の過去の来街経験等の違いを許容しつつ街歩き体験を分析する枠組みを提案した。今後はこの枠組みを適用して街歩き体験の具体的分析を行う。

補注

[1] 本実験は、参考文献6) 7) にて実施した実験のデータを使用し、新たに分析考察を行ったものである。

参考文献

1) 美藤竜一, 宮岸幸正: 都市の回遊性に関する研究 - 福井市中心商店街を対象として -, 日本建築学会北陸支部研究報

告書, 第42号, pp.325-328, 1999

- 2) 本多均, 名取吉一, 鹿島茂: 商業集積地内店舗分布認識構造と回遊行動特性に関する基礎的研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp.7-12, 1984
- 3) 高橋弘明, 後藤春彦, 佐久間康富, 石井雄晋, 齋藤亮, 畑玲子: 商業集積地における来訪者の回遊行動と店舗のひしめき合いとの関係についての研究 - 下北沢駅周辺地域を事例として -, 日本建築学会学術講演梗概集, F - 1, 都市計画, 建築経済・住宅問題2005, pp.1281-1282, 2005
- 4) 長澤将皓, 佐々木葉: 都市空間の回遊行動にみる場所を介したインタラクションの記述と特性に関する研究, 景観・デザイン研究講演集, No.8, pp.14-21, 2012
- 5) 木下瑞夫, 田雑隆昌, 牧村和彦, 浅野光行: 都心地区における歩行者回遊行動とその有用性に関する研究, 土木学会論文集, No.625/IV-44, pp.161-170, 1999
- 6) 高浜康巨, 福井恒明: 行動と意味から見た街歩き体験の分析, 景観・デザイン研究講演集, No.7, pp.98-108, 2011
- 7) モウ大喜, 福井恒明: 会話内容に着目した街歩き体験の分析, 景観・デザイン研究講演集, No.8, pp.1-5, 2012